

エゾヤチネズミ個体群におけるホームレンジとテリトリー 田中亮(高知女子大)

1952 年 7 月下旬から約 2 週間北海道の泥炭地草原で、エゾヤチネズミ個体群を対象としてえられた成績である。生捕罠 99 個を 15 m 間隔で格子型に配置した。このような方法でえられるホームレンジは所謂 trap-revealed range であつて真のホームレンジとは区別して考えなくてはならない。それは罠の設置が動物の正常の行動を制扼するからである。罠に出現した鼠は 82 頭で全部本種であつた。而もその殆んど全部が生殖活動状態にある成体であつたことは注目される。みかけのホームレンジは捕獲 6 回以上で一定の最高値に達することが分つたので、6 回以上の捕獲個体から成体平均値を出すと、 $\delta 0.47$, $\delta 0.21$ acres で δ の値は η の倍以上を示した。これらの値はみかけの行動範囲を示し、真の大きさは不明であるが、雌のレンジが互に接しても、その重要な部分で重ならないことから、雌成体間のみに高度のテリトリー制が発達することが確認される。尙この資料から個体群における親和性、支配形式、雌の優位性などが推論される。

問 (1) 1 日のうちにワナをとりかえると、同じ場所にちがうネズミがはいるが、こうするとテリトリー制がはつきりしないのではないか。(2) テリトリーは成体 η 間にだけ認められ、 δ 、 η 間には認められないのか。(太田嘉四夫) 答 (1) 個体の行動を記録してゆけばテリトリーがはつきりすることもありうると思う。(2) δ 、 η 間には認められない。

野ネズミ類のすみ分けについて 太田嘉四夫(北大・農・動)

札幌市北西端にある競馬場は面積約 17 町歩で、泥炭地を改良し、牧草畑ができています。*Clethrionomys rufocanus bedfordiae* が非常に多くいるが、これと生活形のよく似た *Cl. rutilus mikado* も前者と地域を分けてすんでいる。*bedfordiae* は泥炭地の残っているところにもつとも多く、土壌の水分には無関係らしいが、地被物の乏しいところにはいない。*mikado* は土壌水分の多いところにはいないが、地被物の乏しいところにもすみうる。然し土壌が比較的乾燥し、草の深いところでは両者は所論社会的関係ですみわけ、その結果、*mikado* は *bedfordiae* にとりかこまれたようになつている。蕃殖力は同じであり、特に *mikado* の方が劣勢である原因は不明。*Rattus norvegicus* は数は少いが、排水溝の周辺で前両者と領域が重なり合う。森('52)のおきかえ可能、不可能は条件によつて変り得る。

問 (1) 環境因子の相異が両種のすみわけに関係をもつ事があるか。あるとすればその理由を説明されたい。(2) すみわけの範囲は、分析的に狭めてゆけば個体の行動範囲になると思うがどうか。(北沢右三) 答 しかし、一つの個体群が他の個体群と(この場合は別種)まじり合つてすまないということは何であらうか。やはり種は一つの集団を保とうとする傾向があるように思う。

モグラの蕃殖性について 岸田久吉(林野庁野生生物研)

ここに書くことは、主としてアズマモグラにもとづくが、同属の他の種類にもあてはまる所が多い。(1) 発情: かぞえ年 3 才の秋になると、胴腹中線上に、こげ茶の条斑があらわれ、次第にこくなり、4 才の 3 月に頂点に達する。 η では膣口が完化し δ では陰茎が尖出する。(2) 性的交際: 2 月下旬—4 月上旬、地下で営まれる。(3) 妊娠期間: 大体 10 週間である。(4) 母性々(maternity): 分娩は年 1 回。性行為は 4 才に始まり、6 才まで続く。7 才・8 才でもお産をするものがある。10 才をこえて生きているものはまず無い。尤もモグラの life table を作った人はまだ無いようである。(5) 分娩の準備: 9—11 月、巢室に乾植をもたらし、縦・横・斜に交錯し、牢化・保温・防湿に資する。(6) 分娩: 4 月下旬—6 月上旬、かきあげ(紫)内で行われる。仔数は 1—5、(3—4 仔のことが多い)。(7) 胚後發育: A 幼仔、殆ど不毛・裸体で、閉眼。*Mogera* は一生この閉眼で貫く。腰は大きくて、尋常。B 中仔: 腰が筒状である。C 後仔: 腰がなえる。此の末期に離乳する。D 被仔: 全身に毛衣が生える。以後 3 才に及ぶ。